

新島襄と田村直臣 —「築地バンド」との秘められた交遊—

もと い やす ひろ
本井 康博 (元大学神学部教授)

「三村」、もしくは「四村」

田村直臣（なむら なおみ）（1858〜1934）は、キリスト教界では、知名の牧師であった。植村正久、松村介石と共に「三村」、あるいは内村鑑三を加えた「四村」のひとりとされた。

交遊関係も多彩であった。「札幌バンド」を代表する内村や「横浜バンド」の総帥である植村との交際は言うに及ばず、小崎弘道や海老名弾正（いずれも同志社社長）を始め、「熊本バンド」（同志社系）の面々とも、繋がりが深かった。

半世紀にわたってひとつの教会（現日本キリスト教団・巣鴨教会）の牧師を務めた点では、大阪教会の宮川経輝（熊本バンド）と双璧をなす。

指導した数多い信徒の中では、北村透谷が著名で、洗礼を施し、結婚式の司式もした。留学を含めて渡米は七度、渡欧も三度という海外通でもある。さらに「子供狂」との異名を取るほど、児童文学や日曜学校（現こどもの教会）では、稀有の先駆者であった。

また、「自営館」（寄宿舎）を建て、多

くの苦学生への面倒を見た。音楽家の山田耕筈、学者の石原純・謙兄弟、画家では岸田英作、岸田劉生などは、その出身者である。劉生は、「田村直臣七十歳記念之像」（油彩画、1927年）を残し、耕作は、葬儀（巣鴨教会）においてオルガン奏楽で恩師を送った。

にもかかわらず、田村の存在は今ではまことに影が薄い。名前の読み方にして、異説（なおみ）がある位である。

「築地バンド」

田村は自伝で告白する。「恐らくは私程、波瀾多き、戦闘的生涯を送った者はなからう。私の生涯は、実に誤解と迫害との絵巻物であった」と。「戦闘的生涯」の幕開けは、築地大学である。大阪から東京に出て、同塾で宣教師のC・カロザースの指導を受けた。彼からキリスト教を学び、信徒、ついで牧師となった。

ここで育った、原胤昭を始めとする信仰上の仲間を田村は「築地バンド」と呼ぶ。のちに同志社神学校に入学する長田時行も築地大学の同窓である。

田村は教派的には、当初は長老派（改革派）の「横浜バンド」とほぼ一体である。長老派の神学校でも、植村や井深梶之助らと同窓である。かれら三人は、所属教会こそ異なっていたが、按手礼（牧師任職式）を受けたのは同日、しかも三人ともG・H・F・フルベッキからで、まさに「同期」であった。

にもかかわらず田村は、自己の立ち位置を、地域的にも教派的にも一番近い「横浜バンド」とは、あえて峻別する。「築地バンド」として一線を画そうとするのは、植村正久との確執からである。

日本のキリスト教界でたえず主流を占め続けたのは、「横浜バンド」である。なかでも、その先頭に立ち、いわば「プロテスタントの法王」とも言うべきは、植村であった。

青年時代、この植村とは肝胆相照らした関係にあったにもかかわらず、教会合同運動、ついで「日本の花嫁」事件で、田村は植村と正面衝突をした。そのため、田村は植村が率いる教団（日本基督教会）から除名処分を受けたばかりか、牧師身分まで剥奪されてしまった。

以後、田村は「横浜バンド」（特に植村派）から批判、攻撃、あるいは差別され続けた。「横浜バンド」と同根であったばかりに、完全な非主流派へと追いやられたのである。「築地バンド」の父、カロザースの人間性や指導力不足が、これに輪をかけた。J・C・ヘボンやフルベッキはもちろん、植村や井深たちを育てたJ・H・バラやS・R・ブラウンといった宣教師と比べて、資質面で大いに問題があったからである。

そのこともあって、「築地バンド」は、日本プロテスタント三大源流と見なされる三つのバンド（札幌、横浜、熊本）と比べた場合、見劣りがするばかりか、評価も低い。

新島襄との交流

では、新島襄との関係はどうか。植村や内村との交際ほど、深くはないものの、田村には新島を敬慕する気持ちは強烈であった。新島死後に生まれた次男に「襄」と名づけている。三男も「襄次」である。田村と新島の出会いは、新島が187

4年11月に横浜に帰国した直後に始まる。「新島襄先生は、米国に於て按手礼を受け、宣教師の冠を頂き帰国せられ、我等は初めて東京に於て、先生の尊顔に接した」と田村は回顧する。

田村が次に新島に会えたとするのは、1878年3月から1880年夏である。前者の場合、田村が牧師をしていた教会当時の名称は、銀座教会の礼拝に、東京出張中の新島が参加している。後者の場合、今度は田村が、大阪に出向き、第二回全国基督教信徒親睦会に参加している。ただし、両回とも二人が会ったとする記録はない。

面談が確実なのは、1885年、ニュ



田村直臣
(撮影年月日は不詳。本学神学部蔵)

ーヨーク州である。田村は、回想する。

「先生と私とは、〔関西と関東という〕遠隔の地に居ったから、^{はば}交る機会はなかったが、先生が病氣保養の為、再び米国に渡られた時、クリフトン・スプリングの養生院〔NY州クリフトン・スプリングスのサナトリウム〕に病を養って居られた。当地は私の居った学校〔オーバーン神学校〕から遠くもなかったから一日、枕を携^もり、オーボン学校の寄宿舎のソファ^いに臥しながら、終日、私の部屋に於て、共に語り、共に話し、非常に懇意になつて居った」(「」は本井以下同)。

「私は先生と快談をした」。

一方、新島も日記に、「クリフトンを朝九時に発つて、オーバーンに向かう。神学校に田村氏を訪ねる」とか、「カナダゴのライス夫人に会う。東京の田村氏の友人である」、「田村氏にも手紙を書く」と記す。

夏期学校

田村と新島との最後の面談は、1888

9年の夏(新島逝去の五か月前)である。場所は、同志社を会場に開かれた「夏期学校」である。田村は記す。

「同志社学校は、校長新島襄先生の熱心と人格とを慕ひ、学生は全国より集合して来て、日の出の勢であつた。其れに、リヴァイヴァルは^{おこ}り、宗教的活気は学生間に充満して居った。第一回夏期学校を開くには、同志社学校は実に適当な場所であつた。

全国の教職者〔牧師・伝道者〕達は、基督者、学生達は、心を一つにして講堂〔チャペル〕に集り、新島先生の力ある血ある、涙ある開校の辞を耳にした。其の先生の開校の辞を聴くだけでも、百里の道を遠しとせずして、西京〔京都〕に來た価値は、確にあつた。

夏期学校の中心人物は、新島先生であつた。夏期学校に於て、先生の声を聴いたのは、是れが初めて終であつた。

会期中、田村はもちろん新島と面談している。とりわけ、当時、進行中の教会合同運動について、意見を交わす絶好の機会となつた。「私は此の第一回夏期学校会場〔同志社〕に來り、再び先生と交

りを温めるには、最も好い機会であつた。其れに、組合、一致兩教会の結婚談〔合同運動〕の最中であつて、先生と私とは、地位も違ふが、組合、一致の兩教会の結婚には、二人乍ら〔共に〕正反対〔合同反対〕の意見を持して居った。故に、東西に於て反対の意見を一つにして居った者が、共に意見を交換するので、其の談話に非常な興味があつた」。

ふたりは、おりしも教会合同運動を強引に進める植村のやり口を批判して、溜飲を下げたに違いない。「兩雄並び立たず」とばかり、新島と植村は波長が合わなかつた。

宗派主義

田村が新島にもつとも共鳴を寄せるのは、その教派観である。田村が、自分に近い植村を執拗に批判する要因も、植村が抱く教派観にある。「築地バンド」が特定の教派主義(当初は長老主義、ついで独立主義)に立ったのに對して、「横浜バンド」が当初、「無宗派主義」(いわゆる公会主義)を理想としたためである。それに対して新島は、終始一貫、組合

主義(会衆派)に固執した。彼の宗派主義が問われた好例が、横浜公会牧師人事と教会合同運動である。

新島がアメリカ留学を終えて帰国する際、横浜公会(現横浜海岸教会)は、自

分たちの牧師として新島に白羽の矢を立てた。が、失敗に終わった。当事者のひとり、田村はその原因をこう分析する。

「新島先生は、組合主義には深き信念のあつた人で、我等〔横浜公会〕とは大

いに違ふ處があつた。横浜の無宗派主義の教会は、〔アメリカ留学中の〕新島先生に對して牧師の招待状を米国に送つたと主張し、新島先生は其れを受取らぬと主張せらる。

組合主義を主張する新島先生が(「が」、如何して無宗派主義の教会の牧師になる事が出来るか。其の人の主義如何を知らずして、新島先生を牧師に招聘せんとせしは、実に輕率な事ではないか」。

加えて、待遇問題である。

「又、教会は新島先生を牧師として何程の謝金を呈するつもりであつたか。まさか五円や十円やでは、米國歸りの先生の生活は、不可能であらう。若し、充分なる謝金を拂はんと欲せば、勢ひミッシヨンの金庫によらねばならなかつた。教会は此の点に於て、何んの胸算があつて、新島先生を牧師に招かうとしたのであるか。我等は其の理由を知るに苦しむ」。

新島に同調的な田村のこうした姿勢は、その後、二度にわたつて進められた教会合同運動でも首尾一貫する。



左から小崎弘道、田村直臣、植村正久(本学神学部蔵)。
3人して東京青年会(東京YMCA)や『六合雑誌』を立ち上げた頃(1882年)

教会合同運動(その一)

合同運動は、長老派(一致教会)と会衆派(組合教会)との間で都合、二回に及ぶ。まず、最初は1874年秋で、前者の横浜公会と後者の神戸公会が協議して、合同を確認した。ところが翌年、いざ成約という段になって、神戸側が態度を急変させた。帰国したばかりの新島(在大阪)が、運動の流れを変えた。彼は、合同には批判的であった。

「横浜公会は先方より見事に勿^{はなつ}付られ、初恋も、哀れ水泡に帰したのである」と田村は記す。では、破綻の要因は何か。一言で言えば、教会運営、すなわち教会政治(polity)の差である。

田村はこう指摘する。

「我等の眼から見る時は、(一致教会の)代議政治(間接民主政治)と(組合教会の)会衆政治(直接民主政治)との一致は、主義に就て不可能であった。『代議政治の下に総ての教会を統一せんと欲するは、余り虫の好すぎる話である。関西地方に於て、会衆政治を有して居る教会が、代議政治に屈服せざりしは、大いに

理由があったのである」。

横浜から見れば、破綻の元凶は、新島の宗派主義である。合同推進派の井深は、「新島襄氏等、之に反対して、遂に其の議、破れぬ」と断罪する。

教会合同運動(その二)

それから十余年後、合同運動は再燃する。今回も同じ教派間(ただし教団レベル)なので、田村は「第二の結婚談、持上る」と捉える。

1886年の冬、田村がアメリカ留学から帰国した時には、すでに両派の「結婚相談」は進行中であった。海外で教派の実態を見知った田村は、この時点ですでに悲観的な結末を予感し、「其の相談の初めから、両派の一致合同は、云ふべくして行はるべき理由なきを看破し、(自分)は」正反対の地位(合同反対説)に立つて居った。

要するに田村は、「絶対に反対の地位に在った。植村君と私が、南極と北極に立ち、この異った意見の衝突が、私が植村君との親交を破るの止むなきに至りた

る理由である」。

田村による反対理由は、新島のそれとまさに重なる。

「私(田村)は、自由主義を重んじ、個人を中心とする『組合』教会と、長老教会の政治と信条とを中心とする『日本基督』教会は、油と水と一致することの出来ない事を主張した」。

「組合の方では、組合主義に忠義なる新島先生が、私の如き地位に居られた。不思議な事には、いつも私は新島先生と氣脈を通じ、互に教会の形勢を知らし合をやって居った。私は新島先生の如き人物が、反対の地位に立たれる以上、必ず此の合同は無効に終る、と固く信じて居った」。

要するに、長老派の当事者中、田村は新島にもっとも近い場所にいた。ふたりがそれぞれの陣営の中で置かれた立場も、酷似する。「横浜バンド」の総帥たる植村との確執が、新島と田村を結び合せたのである。「熊本バンド」の有力者、海老名弾正はこう回想する。

教会合同運動では、「余らの方では宮

られた。新島先生は最初から、反対の地位に立つて居られた」。

田村は、第一回合同運動が失敗した時の教訓が活かされていない、と警鐘を鳴らす。つまり、新島が「第一結婚相談の際も、デビス教師(宣教師)と共に委員となり、更に又、破談の局に当られた事は、よもや忘れはしない」と。ついで田村の矛先は、新島の門弟とも言うべき「熊本バンド」の面々にも向けられる。「熊

本バンドは、多数に依つて新島先生を棚に上げんとしたのが、此の失敗を招いた大なる理由である事は、今となつて解らない筈はあるまい」と痛罵する。

田村によれば、合同運動は、「露骨に云へば、我が(長老派)教会に於て、威勢を逞ふして居った横浜党(横浜バンド)と、組合教会内に於て、非常な勢力のあった熊本党(熊本バンド)とが、同気相通じ、此の拳を企てたのである」。

「私は最初から(合同)反対の位置に立つて居ったから、其の結婚破綻の道行きに就いては、賛成者よりも遙に能く知る事が出来た。組合教会も一致教会も、新島先生を無視したのが、其の理由の重なる一つである」と断言する。



田村直臣
受洗五十年記念明治七年十月十八日
1874-1924

「田村直臣 受洗五十年記念 明治七年十月十八日 1874-1924」ハガキ(長田時行宛、本学人文科学研究所蔵)。

ふたつの有力バンドが新島を無視したことが、合同失敗の最大の要因だ、と田村は分析する。

合同失敗の要因

それ以外にも、田村はいくつかの要因を列挙する。いずれも的を射ている。

新島はあくまでも「主義の人」（会衆主義者）である、との基本的な認識が、周囲の者には希薄であつた。そのため「先生の心情を疑ふ」という、「実に怪しからぬ事」が起きたと見る。新島がアメリカにおける合同運動を肌身で体験していることも田村は承知している。ニューヨーク州で実際にいくつもの会衆派教会が長老派教会と合同した中で、「一、二を除く外は、長老主義の教会に吞込まれた。此時、かゝる活例を目撃し、同じ結果を我が国に生む事を〔新島先生は〕能く知って居られた」。

新島は、会衆主義の神髄である「自由と自治」が合同により喪失することを憂慮した。「自由を大安売りしてまでも」合同することに懐疑的であつた。こうし

た新島の主張をきちんと受け止めたのが、同志社の学生、とりわけ同志社教会の青年信徒であつた。

東京の信徒で新島に共鳴したのは、「民友社の社員を中心とせる靈南坂教会であつた」と田村は観る。たしかに終生、新島に傾倒した徳富蘇峰が率いる民友社では、社をあげて反対運動に加勢した感がある。そうした社員らを側面から支援した者こそ、他教派の田村である。「私は屢々、人見一太郎、大西祝、竹越與三郎〔三叉〕諸氏と互ひに気脈を通じて、私の二階の部屋で〔反対運動のための〕集会を開いたことがあつた」と証言する。

人見や竹越、さらに池本吉治などは、新島の股肱となつて反対運動を展開した民友社の若手社員である。田村は、東京における新島派の参謀役を買って出た。

さらに田村は、結果を早急に求めすぎたのが、合同失敗の一因であると観た。どこの国の教会合同を見ても、一年や二年で成功した例はひとつもない。カナダの場合など、すでに二十年もかけているが、いまだにその功を奏さない。それを二年や三年で物にしようとしたのが、失

敗の素であつた、という。当の新島も、日本における合同運動はあまりにも拙速で、準備不足である、と主張する。「植村氏ノ為ニ急クハ、大不同意」（傍点は本井）との不満を漏らしていた。

最後に田村が挙げる要因は、「一致派の者は、若し一致、組合の両教会さへ合同すれば、他の宗派は自ら頭を下げて、不得已、我が合同に加はるに相違ないと云ふ浅薄な考へを有して居つた」。これは、メソジストやバプテストといった他教派を「見下げた考へ」にほかならない。他教派の信徒は、一致派の驕りに対しては、不快感や反発を覚え、合同運動がむしろ不調に終わることを祈っていた、とさえ暴露する。

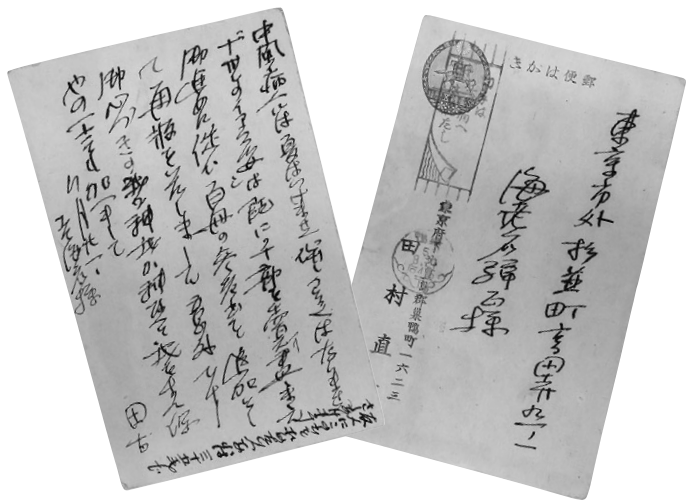
植村にしてみれば、田村は相手陣営と気脈を通じて反対運動に暗躍する獅子身中の虫であつた。許せるはずはなかった。永年の親交にひびが入つたのも、無理はない。

「日本の花嫁」事件

ふたりの最終的な破局は、「日本の花

嫁」事件（1894年）である。新島死後の事件だけに、新島との接点はすでない。

事件の発端は、田村が英文で出版した著作、*The Japanese Bride* である。同書は



海老名弾正に宛てた田村直臣のハガキ
(1930年11月21日付、本学人文科学研究所蔵)。

「国辱もの」とばかり、日本のマスコミが槍玉にあげたばかりか、身内の長老派からも糾弾された。その結果、「日本人ノ恥辱トナルベキ事ヲ記載」した「同胞ヲ譏諷シタルモノ」として、教団内裁判で告訴されるにいたつた。

教団総会では、「同胞譏諷罪」の罪名こそ否決されたものの、田村は断罪された。*The Japanese Bride* は、「国を売って金を儲ける為に著したるものである故に、基督教の教師〔牧師〕たる資格なし」との「判決」が出た。「売国奴を以て我が首を刎る」処置は、「横浜党の殺人罪」なり、と田村は怒りをこめて植村派を糾弾する。

マスコミで田村を弁護した少数派に徳富蘇峰がいる。自身の『国民之友』（二三二号）で「若し、『日本の花嫁』を書きたる程の過失を以て、之れを売国奴なり

と罵るべくんば、日本の言論界は、極めて狭隘なるものなり。吾人は、平生、必しも田村氏に感服する者に非るも、日本基督教会が、名を之に藉りて、氏が教師職を剥奪したるは、正直の処置なりと信ずる能はず」と論評した。

蘇峰は、かつて同志社を退学して東京へ赴いた際、新島との約束上、近在の教会を訪ねた。牧師は令名轟く植村であつた。植村の応対は、新島とは天地の差があつた。蘇峰は「斯る漢」など相手にしないと憤慨し、かねてのキリスト教疑念も手伝つて、教会と絶縁した。初対面で新島の人柄にほれ込み、一生の師と仰ぐ、と即断した時とは、まさに対蹠的である。

牧師を免職された田村は、その後も独立伝道者として長老主義の教会で黙々と牧師を続けた。彼が古巣の教団（日本基督教会）に復帰できたのは、事件よりはるか32年後、植村が亡くなった翌年（1926年）のことである。